

中国・寧波（ニンポウ）で出会った子どもたち

瀬戸内市立行幸小学校 石原 順子

ここ数年、企業の中国進出に伴って、中国で学ぶ日本の児童・生徒数は大幅に増加しています。その中で、日本人学校がない地域に住む子どもたちは、地元の学校に通いながらも「日本語で勉強したい」という強い思いをもっています。私が上海日本人学校に勤務していた当時、上海周辺では、南京・寧波などの都市で、地元日系企業が主体となつての補習校が開校していました。上海日本人学校ではそうした補習校への支援として、巡回指導（毎年9月）を行っています。今回はその巡回指導（2007年9月）を通して知った「中国で学ぶ子どもたち」について報告します。

1 寧波（ニンポウ）日本人学校補習校について

寧波（ニンポウ）は、上海から高速道路で4時間の位置にある歴史ある港町です。古くは遣唐使の上陸の拠点となる港としても日本とのつながりがありました。最近では日本の企業が進出し、これからさらに日本企業誘致などの発展が期待される地域です。



現在の寧波の中心部

この寧波市には約20人の日本人の子どもたちが生活をしています。

（2007年当時）平日は地元のインターナショナル校（英語）や中国の現地校に通い、土曜日の午前中は日系企業の会議室を借りて、補習授業をおこなっています。私が巡回指導で参加した年は、1年生クラス4人、2年生クラス3人、4年生クラス2人という3クラスの構成でした。指導の先生方は、教員免許をもった日本語学校の先生方が講師をされています。

2 巡回指導でおこなったこと

私が担当したのは、2年生の「国語」「算数」の授業です。その後、日本語学校の先生方の授業を参観して、よりよい指導方法を話し合いました。2年生という学年の区分は日本語の能力で分けているため、現地校4年生と、2年生の児童、計2名の児童と勉強をしました。（1名は欠席）国語では教科書の音読や、言葉あつめの学習をしました。続いて算数の指導では、4年生の児童には簡単だったので、興味をひきながら日本語とつなげて考える部分が本当に難しいものだと実感しました。その後、地元の先生方の授業を参観しましたが、とても熱意のあるていねいな指導が印象的でした。研究協議では、視覚に訴える掲示物やプリントの工夫についても、話し合うことができました。

3 素顔の子どもたち

平日は使わない日本語を話すことができる土曜日の補習校を、子どもたちは本当に楽しみにしています。「英語・中国語は使用禁止」になっているのですが、つい熱中してくると、子どもたちの口からは普段使っている英語・中国語がとび出してきました。生活の様子について聞くと、学校生活では英語か中国語、家に帰っても、テレビは中国語。日本語に親しめるのは、家族と話すときと日本のDVDを観るときだけ、ということでした。そうした言語環境にいて、これだけ日本語を使うことができる子どもたちの柔軟な能力はすばらしいと感じました。

4 保護者の願い

保護者の方は、インター校や中国の現地校で学ぶよさを感じつつも、いずれ帰る日本の学校の学習に対応できるだけの日本語能力、学力をつけたいと思っておられます。とくに社会科の学習では、地理や歴史などが十分に学べないことに不安を感じておられました。土曜日だけの補習授業では不十分なので、これからは家庭学習でいかに補充していくかということについても、熱心に意見交換をすることができました。

5 終わりに

補習校に関わる多くの方々や子どもたちが、こんなにも日本語での授業を熱望し、日本語を話すことができる環境を求めているということに驚き、感動する巡回指導でした。ここでの子どもたちや先生方の姿に、日本人学校の原点を見る思いがしました。日本語を使って、日本と同じ教育を求める子どもたちのために、私自身ができることをさらに見つけていきたいと、今も強く感じています。